

錦織りなす紅葉の天狗岳へ

岩井 淑

まずいなあ。先程まで遠望できていた穂高連峰がにわかに雲の中に姿を隠した。低空に黒い雲が湧きだし、上空では青空に浮かぶウロコ雲の白い部分が徐々に拡大し、太陽を覆い始めている。風も強まってくるが、これから向かう天狗岳はまだ陽の光の中だ。反対側の横岳、赤岳、阿弥陀岳はすでに影っている。

ここは硫黄岳山頂。平日の10月上旬、登山者の数は少ない。赤岳鉱泉キャンプ場でテントを撤収している時に美濃戸口から登って来た登山者2人。そして先程山頂で1人の登山者に会っただけだ。頂上からは夏沢峠に建つこまくさ山荘、峠の左下にオーレン小屋、右下に本沢温泉小屋が黄色、朱、橙色に色付き始めた木々の中にかいま見れる。山の木々は山頂から化粧を始めている。

夏沢峠への道はガレ場を急降下して行く。やがて黄色く色づくブナの木々、ナナカマドの朱色や赤い実。足元にはゴゼンタチバナの小さな赤い実が目立つ頃、峠に降り立つ。

夏には賑わうであろう夏沢峠も今は眠っているようにひっそりしている。小屋では赤岳鉱泉小屋でもそうであったが、短い秋からすぐに訪れる冬の準備のため、薪ストーブ用の薪割りの仕事に追われているようだ。

根石岳へと出ると今までの樹林歩きから開放されて明るい稜線歩きとなる。根石岳南面は駒草の自生地のため保護用に緑色のロープが張られている。駒草も夏の日々、多くの登山者達にピンクの可憐な姿で十分に眼を楽しませたが、今は灰色の小さな固まりとなって厳しい冬を迎えようとしている。

ガスが出てきたなあ、と思うまもなく東天狗岳、西天狗岳はアッという間に乳白色の中へ姿を消してしまった。まずいなあ。いやあまずい。

後方にパッキリと爆裂火口の断崖を見せていた硫黄岳もガスの中へと姿を消した。10分待ってもガスは晴れないので東天狗岳へと降り始めるとフワッという感じでガスが飛び、双耳峰の天狗岳が姿を現した。まるで猫の眼のように天候がくるくる変わる。気象状況が不安定の証拠だ。注意せねばならない。

東天狗岳の東面は急な崖になっており、滑落防止のため真新しい鎖が取り付けられている。頂上直下が岩場になっているが距離が短いのでどうってことはない。

山頂で寝そべっていたら奥蓼科の洪の湯登山口から登って来たという20代の若者とミドリ池のしらびそ小屋から登って来たという60代の夫婦に会う。今日出会った6人目の登山者である。朝、見えた穂高連峰は雪化粧をしていたこと。あと1週間程で紅葉は最盛期を迎えること等をはなし、黒百合平に向けて降りだす。

黒百合平に建つ黒百合ヒュッテの青い屋根は眼下に見えるので、そう時間はかからないだろうと思っていたが、降り出した途中で再びガスが発生し視界は10mあるかなしかとなる。ここで3たび、まずいなあ。非常にまずい、という感情が湧いてくる。

岩に印された白のペイントマークをあるいは踏み跡を丁寧に探しながら下山していくのだが、ときたまコースを見失うことがある。晴れていればどうってことはないのだが、視

界が10mにもなり、行き交う登山者も稀れともなると行動はより慎重にならざるを得ない。途中、大岩のころがる塞の河原で道に迷ったかな、元いた所へ逆戻りしてしまったかな、と感じる場面もあったがガスの中にボウッと浮かび上がってきた黒百合ヒュッテ前に飛びだした時は本当にヤレヤレであった。

テント場内を歩いてみたがテントは1つも張られていない。昨日のキャンプ場でもたった1張りだったので、このテント場にもキャンパーはいないだろうとの予感当たった。

テント場に着いて考えた。

当初はこのテント場に1泊し、明日下山する予定でいたのだが、第1にガスバーナーのノズルが壊れてしまいお湯を沸かすことができない。第2にガスはますます深くなり、天候は悪くなる方向に進んでいる。第3に夏用のテントとシュラフでは10月上旬の霜が降りる朝は厳しい。第4に現在の時刻は12時50分。等から判断し、渋の湯登山口まで下山することにした。

早速、バスの時刻表を調べると14時45分の茅野行きが最終バスである。持ち時間は2時間弱である。2時間あれば下まで降りられるだろうとの判断の下、岩がゴロゴロする登山道を一気に下り降りる。途中、20代前半の2人パーティーのOLとすれ違い、言葉を交わすが、彼女達にとってはこれからガスと雨が待っているのかわいそうだなあと思う。

黄色、橙、朱、薄紅色等に色付いた木々の下を、それらの落ち葉を踏みしめながら天下の霊湯・渋の湯に着いたのは最終バス発車時刻の20分前であった。

1992. 10. 3. 記